

オリーブの樹

第151号

2020年9月10日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！

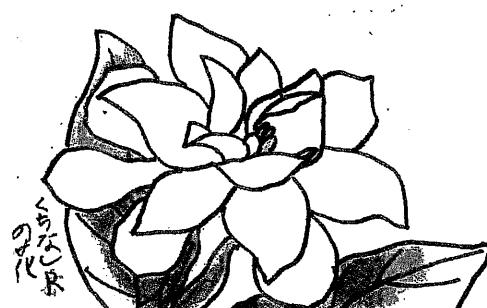


目次

- P 2 夏の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P 11 残書お見舞い 重信房子
- P 12 読んだ本 重信房子
- P 15 泉水さんのこと 重信房子
- P 17 「パレスチナ解放闘争史」ご案内

夏の歌

二十年目初の懲役工場で起き上がり小法師の達磨の製作



紫陽花の雨に仰かれ砂利道に倒れたままに因縁の行進
敗残の夢の続きを語れぬままパリて別れし友は逝たり

鬼百合の花がら一齊に散り始むインター歌う落語家の友逝く

紫陽花の花降るよう雨覆す不夜城も今日梅雨入り宣言

あと二年俺は死なず迎えに行ふと伝えし友の訃報届きぬ

手と上へ上へと重ね含む勝つと誓いし友らの旅立ち

逆縁の哀しみ、らえ娘の死去を伝える友に白百合送らむ
ゆづりと昇る満月不夜城を照らせば夢想と幻視の舞台

重信 房子

独居みい 5月2日~8月1日

懲役軽作業 これが私の「新しい生活様式」です!

重信 房子

ことはありません。文芸部で武者小路訪ね討論したり、自殺を「自由」と主張する他校とシンポジウム争したり、「小さな親切運動」に参加したり、弁論や「青年の主張」etc。高校の社会科の鈴木亮先生はそんな私たちを「現代高校生気質」などと本を出していましたが、皆何かしたいとううずしていました。でも社会活動の方は近い感がありましたが、政治活動はきっかけがありませんでした。きっかけがあれば加わったでしょう。そんな自分だったから、資料や小林さんの報告を読むと心情・情熱は時代に関係なく高校生は共通している感じがします。

今の方が世界が身近にあり、自分の主張を表現する手段もSNS含め多様に可能です。私が大学で初めて得た社会政治活動の実感「自分が世界と社会政治的に結びついでいるという発見」は、今の高校生はやすやすと感覚されるのだろうと思います。高校生こそ新しい力、とくにこのコロナ禍を経た新しい世界への問題提起主体たりうるのは、グレタさん含めて必然だと思いました。年寄り、大人のわけ知りの国の指導者たちが、こういう高校生から学んでくれるどいいのですが……と思いつつ語りました。語り合ってみたい若者たちです。

5月2日 昨日4月土曜会の報告を受け取りました。4月の土曜会は「現在の高校生の闘いとは」と題して、小林哲夫さんが話されています。小林さんは1960年生まれで、2012年「高校紛争1969-1970『闘争』の歴史と証言」を著している教育ジャーナリストです。

2012年に高校生の本を出すために当時の人々と会ったり、出版後は3・11以降反原発運動に高校生が関わっていることもあって、2010年代の高校生や大学生、10代の社会運動状況をフォロー・分析しておられます。新聞記事のコピーを示しつつ、シールズの前身のサスブル、シールズ、高校生のティーンズソウルの関西・東京の傾向とその要因、政治活動の禁止から約46年たって、18歳選挙権引下げとリンクした政治活動を認めるところになる動き。学校当局は高校生が街頭に出て集会に出る分はいいが、校内で政治活動はダメということになったそうです。昔と決定的に違うのはSNSが普及していて、校内ではダメとか外ではいいなど現実的でない、と述べています。

2015年に安保法制に反対した高校生から、今の高校生はまた違った傾向で、まずは「気候」が問題とし、安倍打倒とか言わない。グレタさん世代で結び合っていて、とくに都立国内高校では帰国生や外国人授業の特性もあり、情報も入りインターナショナルスクールなど活発なようです。浜松で開誠館の気候デモには校長ら含めて400人位のデモの資料もあります。また、高校生が論理的に入学試験制度にノーを突き付けていること。以上のような2010年代の高校生の運動を紹介しています。

私が社会から隔離されている条件もあり、また新聞を読んでも高校生の活動を系統的にフォローしていないせいもあって、こうして小林さんが資料説明されると、いくつかは、あ！読んだことがあると気付きます。自分を振り返った時、高校時代ほど何か関わりたい、表現したい、でも何をしたらいいのか分からない、けれど好奇心と知識欲と社会に踏み出したいという思いに駆られていた

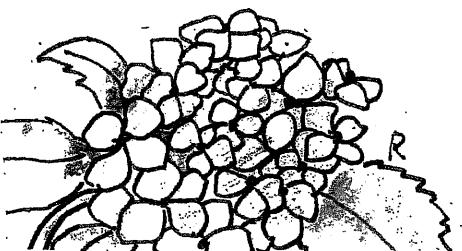
5月3日 憲法記念日。毎年新聞のアンケート調査が気になります。コロナ禍で今年はどう動いたのかと。憲法を変える必要43%（昨年38%）必要ない46%（昨年43%）と抵抗したのは、え?です。でも9条改正は変えない方が良い65%（64%）変える方が良い27%（28%）で悪化していないようです。憲法変える気運は高まっている21%（22%）高まっていない76%（72%）とのこと。また今日の新聞で、国連大学の報告書によると、貧困ライン（1日1.9ドル未満で生活している）これまでよくなってきていて、SDGs（持続可能な開発目標）の目標では2030年までに貧困撲滅を目指してきたが、コロナで消費が20%落ち込むとして想定した場合、貧困ラインを下回る人が約4億2000万人増え、10年前の水準に戻ってしまうとのこと。

コロナは国境を越えるけれど、確実に弱者・貧困層に犠牲を強いいる今の世界の構造です。

5月11日 「季刊アラブ」が届きました。パレスチナで「トランプ中東和平案」に対する世論調査(2/5~2/8 パレスチナ政策調査研究所PSR)を錦田愛子論文に記しています。それによると、まずパレスチナ自治区の99.4%が、支持しないと答え69.2%が失敗すると見ていています。オスロ合意に基づく二国家解決支持と答えた人は38.6%、反対は59.1%、その理由として「二国家解決はもはや不可能」が6割を超え、「占領を終わらせるために、最も有効な手段は何か?」との問いに、もっとも高い支持を集めたのは、武装闘争で50%。平和的民衆抵抗運動は2割、交渉も2割。「武装闘争もしくは武装したインティファーダへの回帰でトランプ案に応じるべき」が64.2%であったと記されています。「オスロ合意の停止を求める」は68.7%、「イスラエルとの治安協力の廃止」が76.8%。自治政府が住民から不信任されている現実を数字が示しています。

5月24日 日曜日。今日は中東では、ラマダン明けの筈です。コロナ禍の中、イード(祝日)も厳しいでしょう。パレスチナ、イラク、シリア、レバノン、それに北アフリカの庶民たちのラマダン明けの楽しみを思い返しつつ…。スポットニュースで明日東京などすべての緊急事態宣言は解除とか。解除になれば、ここでも面会がまた、OKになるでしょう。患者たちも待ち望んでいます。

5月26日 今日の新聞で菊田幸一教授が、受刑者の医療体制の見直しを求めていて、まったく異議なし!です。「日本は、世界に誇る国民皆保険といいつつ、なぜ刑事施設受刑者らが、それから排除されているのか?!」と強く訴えています。世



界の国々では、厚生省が所轄する受刑者らの健康を、日本では法務省が管轄しており、明治の監獄法が2006年新しく平成監獄法(刑事収容施設法)に変える時にも菊田先生(当時法相の諮問機関委員)らが、厚生労働省への管轄にすべきだと主張したが、実現しなかったそうです。「国は『法務省予算で十分に医療を受けられる』というが詭弁だ」と断じ、どれだけ受刑者の「公民権停止」が命にかかわるもの、形をかえた刑罰となっていると訴え、ドストエフスキイが、160年前、自らのシベリア経験をもとに「死の家の記録」を書いたが「現在の日本の行刑と似ている。防疫もそうである。(職員優先で面会禁止など含)日本の行刑の実態は、19世紀ロシアと同じレベルといつていい」と断じています。そして、刑事施設の医療体制をこのコロナの機会に検証変革を求めています。人間の命にかかわる健康保険の適用を全国の日本の住民に。受刑者を除外せずに!保険がきかないためほとんどの人が、獄外同様の医療を受けられません。当センターのような医療刑は、設備はありながら刑務所から移送される時から手遅れが多いのです。それに自費で歯科治療をしている経験からいえば、(保険がきかないため)私にとっては膨大な出費です。人間のいのちに関するところ、とくに弱い人々に手厚くという原則を貫いて、まず刑務所の皆保険化を!と願っています。

5月29日 今日はみごとな快晴です。思わずこんな歌が溢れます。あの日の朝を思いつつ“快晴の君の命日あの日は雨棺を待ちて濡れた寒さよ” “棺待ち刑務官らと対峙した寒き雨降る君の旅立ち” 今日はこんなに晴れて暑い位なのに、あの年3・11の年の5月29日は雨と風と寒さに、友人たちが丸岡さんの棺を待って震えたと聞きました。寒さばかりではなく悲しみからだったのでしょう。もう9年も経つのか…と。振りかえる年月はとても近くにあり、いつも丸さんを日常の中にふと思い出します。“戦友の命日に捧ぐひまわりとほたるぶくろとインター・ナショナル” 合掌。

午後に監獄人権センターのニュースレターNo.102を受け取りました。センターによる「刑事施設等における新型コロナ感染症の感染拡大を防止し被収容者等及び職員の安全確保を求める声明」が最初に掲示されています。第一に拘留取り消しや仮釈放制度を柔軟に活用した被収容者等の釈放

をもとめ、第二に面会禁止などの制限に対し、電話等の代替手段による外部交通の確保を求め、第三に感染者に対する適切な医療提供、公表などを求めています。まったく同感です。すでに感染している東拘、大阪拘、渋谷警察署などの事例や防止対策なども詳しく解説しています。他には「強制労働の廃止、賃金制の採用に向かう世界の刑務労働の流れ(海賊船)」を紹介し、国連データ(刑務労働支払いは刑務官の最低等級に支払われる平均賃金の何%か?)が表示されています。韓国、ペルー、シリア、ウクライナなど91~100%。日本からは解答せず。日本は強制労働であり、いかに搾取し、受刑者への支払いが「報奨金」の名で労働対価が支払われていないかは、世界水準から著しいことです。

5月30日 朝から青空の快晴です。今頃の乾季のペイパートの青空のよう。乾季は雲もなく高い空、星も見事です。夏のひまわり、本タルブクロが病床にみごとに咲いて、戦友たちを思い出す静かな週末を過ごしています。“地中海星降る岬の花畠五月の詩を友らに捧げん”

6月1日 今日突然に2人の方から佐藤秋雄さんの5月27日の逝去を知らされて果然としています。先日ひさんからの手紙で、秋雄さんが5月7日から相模原の国立病院に入院し、化学療法を受けると聞いたばかりでした。秋雄さんと電話で話したひさんによると『はっきりした元気そうな声でしたが、10年前の大腸癌に始まり肝臓、左右の肺、前立腺と次々とガンの手術をして『もう切るところがない。どうやって生きているのか不思議だ』と医師にも言われたそうです。『おれは死はないよ』と笑っていましたが、じつは大腸癌が再発して、もう手術できないそうです』とのことでした。そして一緒に活動していた私のことも懐かしそうに話し、「あと2年。俺は死なないから迎えに行ける」と断言していたそうです。佐藤秋雄先生生きて出会ったかった……。「ブントの労働戦線」といったら佐藤さんが東京の代表で、反戦青年委員会の世話をとしてよく知られていました。明大の学生会館にいつも訪れては屋間部役員部の仲間と明るく屈託ない大声で講義の意義を語り、ブントを愛し、情熱一杯だった佐藤秋雄さん。「俺は福島の百姓だ!」「労働者の魂をブントはもつ

とるべきだ!」「反戦青年委員会の世話を人何てパクられ要員だよ」豪快に笑いながら、あの68年69年何度も逮捕されながら意氣軒昂だった先輩を忘れることができません。遺作となった「ブント—その経験の一断面」で知ったのですが、福島から19才で上京し、住み込みで旋盤工見習いとして働き、「旗揚げる起業の夢」は1962年に専修大学二部の自治会活動でつぶれ、夜学生の切実な願い、「二部差別反対」や「運動選手への学生割引」など求め、明大の伊渡尚義先輩たちと共に「夜学連再建」をめざし、日韓会談反対などを闘っていたと知り、新入生の私がその片隅と一緒にデモに参加していました。そして佐藤先輩は労働者仲間が明大二部にいると引き合わせてくれて、このS君は、初期現研メンバーの一人として一緒に私はブントの加盟書を書いたのは67年春のことです。その頃の専修大の佐藤さん、Nさん、Iさんら私たちも社学同仲間で中大のKさんやMさんらといつも一緒に行動していたのを思い返しています。佐藤さんの本では「1980年アイヌと出会って大きくその思想(行動様式)を変えた」と述べています。ブント流の理論ではなく、生きた人民、抑圧された人民、とくに琉球・沖縄や人民の歴史に依拠する闘い方にめざめ、現在まで闘い続けていることを遺作で伝えています。「足のウラ」で学び活動する一貫した姿勢で闘い続けた佐藤先輩、「7・6事件」で後に赤軍派となる塙見さんらからさらき議長共々リンチされながら、その怒りを闘いの力として赤軍派の誤りをしっかりと遺作にも記していく、マル戦での暴力含めて赤軍派の塙見さんらのことを、過ればせに知りました。赤軍派の一員として謝罪しましたが、私をブント仲間としていつも暖かく励まして下さり、「オリーブの樹」にも寄稿して下さった佐藤先輩。再会の挨拶も果たせず永別を想えたことが無念でなりません。明るい楽天的な革命精神、情熱の革命家佐藤秋雄先輩に最愛の敬礼を送り道草とします。合掌。

6月3日 受けとった人民新聞1717号で、モラレスのボリビア社会主義運動(MAS)がモラレス大統領をクーデターで自放した憲法に反したアニエス暫定政権に対する闘いを紹介しています。「生きることが第一」というコロナ対策などの政策を発表し、次の大統領選にモラレスのもとで経

首相だったルイス・アルセによる政権奪回をめざしていることが載っていて興味深い。コロナパンデミックとグローバル資本主義が人類の破局的な事態をもたらすことを想定した社会主義的政策です。勝利できれば再びブラジルに至るまで新自由主義を追っ払うことができるのですが……と注目しています。フォーリンシアフェアーズでは「財政支出でコロナ恐慌を抑え込めるか？」と。世界中が裕度の財政支出を行なぎるをせず、「ハイパーインフレ主義」の実験のようなもの。でも先行きはわからない。シンパチエになるか、日本になるかと展望を表現しています。(日本は、GDP当債務200%近くても金利とインフレ率が安定しているとして)多額の借入と財政出動が世界中でおきており、それがシンパチエではなく日本のような状況を作り出すなら楽観的になれる。しかし政府支出で永遠に現実世界の経済活動を代替できないとする論文です。でも日本は中間層がこの10年、20年で疲弊し格差貧困がコロナで露わになり、そうした層への大胆な財政支出の組み換えなしにはいきづまりそうです。それにしても首相が、一般国民の生活実情も想像できない日本は不幸です。トランプのように……。

6月9日 「ブチの大通り」125号受け取りました。智子先生の歌、水田ふうさんを悼んで“関西弁あかるくひたむきに生きてこれられし水田ふうさんが墨かさを刺してつらぬく”の一章。水鳥の歌がとっても気に入りそこから一首“水鳥には水鳥の友あり夜明けには声を鳴めており空の明るむ”。今号はコロナ関連が多く、全部興味深く読みました。Yちゃんのマスクの貢献すばらしい！器用でみんなの役に立っている働きで、大変そう、そして楽しそうです。「コロナ状況下を生き抜く野宿の仲間たち、毎朝のセンター行動から見えるもの」では山谷労働者福祉会館活動委員会のコロナ下の闘いと成果など、美しい中での精り強い闘いです。

「緊急事態宣言」で城北労働福祉センター(伊原・実際の運営とも東京都)の日雇い仕事の制限、娯楽室閉鎖に立ちむかひ少しずつ実現したこと、引き続く休業補償・特定定額給付金についての交渉も続いている様子を知ることができます。

M子さんの女川町議会・原発対策特別委員会の

報告も、脱原発の大変さが分かるレポートなどもりだくさん。スペイン風邪とおじいさんの話も。コロナの中、お土を「待つ」のではなく、たくましく勝ちとる姿こそ「新しい生活様式」と読みます。まず一読しいつも送って下さること感謝しています。

今日、当施設では「マスクの着用の変更」放送がありました。居室内での点呼から就寝までのマスク着用が不要になり大喜びです。このまま室内着用義務続いたら息苦しさで熱中症になりそうでしたもの。

6月10日 今日は午前中に処理課の調べがありました。健康状態、作業労働の意志、出所までの反省や過失方、出所後の生活の見通し、どう考えているか等、12月にも調べられた点です。でも今回は前回の人ではなく、処遇統括の人か、穏やかに話のできる人で、こちらも話ができました。

午後告知の担当がきて「法70条2号により支援連ニュースは交付不許可になりました」とのこと。残念。どんな内容が不可だったのでしょうか……。

6月12日 面会禁止が解除され、初めての面会法要です。でも刑務官から始めて「講話・法話以外の話は認めません！」と宣されて驚きました。これまでだって法話、短歌の話や唄のこと、身体のことをおしゃかなか話なのですが……。和尚は気付かって下さって、いつもの半分位の時間で面会を終えられました。久しぶりに会え、語れなくても講話の中で気持ち整理できることはありがたいことでした。“法要の講話以外は許されず健常気遣り対話もならず。コロナを主軸に面会不可でしたから、久しぶりの面会は嬉しいものでした。

6月17日 6月の土曜会報告を受け取りました。前回と同様、3密対策をとりながらの開催で20人以上の参加です。今回のゲストスピーカーは、慶大4年の田中駿介さん。彼は「情況に『未完の1968年』公共への異議申し立て」から「回復」の時代へを寄稿されている若手論客とか。朝日「論座」寄稿の「新型コロナで露呈する学生の『格差』問題」の内容をベースに話をされ、若者参加、活気の土曜会報告です。学生の大多数は、親のすねかこりではなく、経済的弱者。平時には見過されていた「経済的格差」は、「教育格差」としても顕

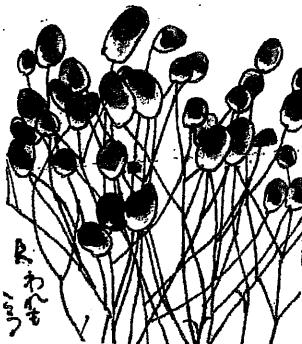
在化している。「自費要請と学びの環境整備」はセットであり、大学には、学費減免措置や、生活費給付の拡充を訴えたいなど厳しい現実をレポート。

「自費要請するなら金よこせ世谷デモ」のメンバーで、5月1日に都内学生実行委のよひかけで、ハチ公前から安倍官邸・麻生邸を練り歩いたとのこと。5月24日も土曜会も加わって「補償しろ」デモへ行なってきたそうです。若い大たちは、たちあがらざるを得ない姿こそ、「新しい生活様式」とする生活です。「メーニュース」の24号も届きました。表紙・グラビアは、和尚たち新緑団です。バッチャリとグラビアに写っています。

6月18日 「オリーブの樹」150号が届きました！友人たちの寄稿、どれもありがたくさん嬉しいものです。本当にありがとうございますと表紙をみてア然、編集ミス！「72年ダッカ闘争の頃の特集」とリックダ闘争をダッカとし、本文の15Pの大きな表題も「ダッカ闘争」どうしたのでしょうか。寄稿して下さった方々、読者のみなさんに申し訳ありません。

でも150号への寄稿には感謝感激しています。パンタさんのファーストアルバムもセカンドアルバムも事件と重なって発売禁止とは……(結句)申し訳ない時代の共有の友です。でも「ライラのバード」をアカペラで歌ってくれたこと思い返しつつ、審査、審査、密着、密会、密談、密会の再会時を楽しみにして、その年には、リックダ闘争50周年でもあり、発売禁止50周年で、ファースト、セカンドアルバム含めて再発売を！と願うばかりです。よほどパンタさんとは縁があったのですね。車のバーツもベンガジの砂と化して……。あの時代の文化、歌、楽しく元気だった側面を思い楽しい気分です。早川さんの来歴は知りませんでしたが、私が発ったあの京都の様子を少し知ることができます。大変な中、奮闘する友人たちの顔がうかびます。また、「Sクンの話」として記しておられるごとに、私も枕の経験が蘇り、時代を思い返しました。みんな早川さんのいうように「未熟というよりは、ただ若かっただけかもしれない」と胸に響きます。

足立さんの文「困難に喘いでいる紹介の彼方から激励が」で、当時、リックダ闘争の帝王を東京で一手に背負いながら、逆に前へと跳躍した足立さんらしい姿がよくわかります。どんな時でも困難や壁にぶちあたると左へ前へと跳ぶ足立さんを、



それ以来も共にしつつ活動した日々が浮かびます。どんなに大変だったかと改めて感謝しつつ語っています。

中山さんは、あの時代と、庄司先生のこと記して下さって、ありがとうございます。庄司先生は、救援連絡センターで水を得た魚の如く囲う者を励まして、国際主義をわきまえておられる方だったのです。何度も救われました。73年、山口淑子さんのインタビューを受けたあと、庄司先生と足立さんとベンガジの日航機爆破の対策を練って私と別れたあと、再び翌日会う予定の足立さんが日本政府の要請で拉致拘束送還されました。知らずに庄司先生が足立さんのホテルに寄つてから私たちと会うつもりが、ロビーに行くと、ホテルのマネージャーやスタッフが、足立さんの荷物を伝え、急いで隠した足立さんの荷物を庄司先生に渡してくれたのです。驚く庄司先生にホテルのマネージャーが、ここはリックダ作戦に殉職した日本人が泊ったホテルだと言つて、それを誇りにして足立さんや庄司先生を助けるのは、あたりまえだと礼を言われたと感動して話してくれたこと。「本当に国際主義の街だねえ、ペイルートは」と庄司先生の涙もろい顔がうかびます。また、ある日は、たそがれの東欧の石畳を歩きながら、パンタさんのように、「私は一度ラテン米に行ってみたいと思ってるんだが、ねえ、どうだろう、次はあっちでやつてみたら」などと冗談まじりに、樂しい先生を思い返しつつ合掌します。私も、5月特集に当時を振り返りつつ記しました。

竜子さんの絵、御多忙のところ感謝しています。

6月24日 「三壽急逝」の計報に心から惜別の挨拶をおくります。落語家柳家三壽として知られていたのでしょうかが、私は落語を聞く機会もなく永別してしまいました。ハンサムでGパンの似合

オーラル・リテラシー

う素敵な着者「たけし」しか私の中では思い出せません。67年68年の明大学生運動は「二・二協定」の敗北から盛り上がり、社学同全盛の時代です。たけしの他に数えきれない明るい闘う仲間たちが居ました。たけしは学園祭では司会をして、最後の夜は学館と高学部の間の広場を埋めつくして、満員のディスコ大会。みんなを楽しませるスピーチはいつもたけし。最後にたけしが高らかに「ああインテナショナル彼らがもの」と歌い、それに続いて皆で「起て戦えたるものよ」と歌が始めた光景が浮かびます。シャイで少し孤独でそして表裏のないまっすぐな人。アルバイトはサンドイッチマン。口上があとからあとから出てくるし「コメディアンやつたら!」などとひやかしたもの。落語家になったのですね。でも、ごまわりや人を蹴落とすことのできないたけしです。

東拘に面会に来てくれた時は、昔のたけしではなく、着物の三輪師匠でした。その言葉使いの丁寧さにこれまでの彼の苦労を感じたのは私の想い違いでしょうか。

“インターを高らかに歌う落語家が居るとアラブに聴こえむ消息”

“鬼百合の花びら一斉に散り始む三暮急逝の訃報を知る夜”

直に聴けなかった落語は彼岸で聴かせて下さい。それまでさようなら。

6月25日：甲壁の中のジャンヌ・ダルク『Paix2 プリズン・コンサート500回への軌跡』(鹿砦社刊)受け取りました。「こういう人たちがいる限り日本にもまだ未来はある！」と本の帯にあるように、べべのお二人が20年かけて日本の北から南まで全矯正施設(刑務所や少年院)を訪れ、獄内で行ったコンサートの記録です。捨るとその大偉業が写真や巻末の一覧で、何時何処に行ったのか分かり、刑務所の内側を知る私は本当にすごいことだ

と、この500回の記念に出された本を読んでいます。私も2013年に八王子医療刑務所でペペコンサートを経験しています。刑務所言葉を使って(「願望を出して」とか「報奨金で」と笑わせつつ、歌はプロだし歌詞は泣かせるし、みな食い入るようにどの懲役演芸よりも盛り上がっていました。本当にPaix2(ペペ)はもっと報われていらし、もっと知られ、TVでも通常番組で語ってほしい。とっても良い本、出版されたばかりです。本送って下さってありがとうございます。

今日は雨。伊波先生の命日です。明大の60年代を思い返しつつ伊波さんやたけしや……思い返しています。

6月26日 新聞で高橋武智さんの訃報を知りました。わだつみ会の理事長6月22日死去、85歳とあります。20代の私と30代の武智さん。お互いに未熟で、支え合っているつもりが主觀的願望・希望的観測の花を咲かせて失敗。強く反省し、考え方を改める日々でした。以来別々に進みましたが、教訓は胸に刺さります。ご冥福を祈り、再び反省を思い返しています。

7月6日 7・6の日。被害に遭い、批判し続けてくださった佐藤秋雄さんを偲びつつ、この反省の日を迎えていました。熊本は大変な様相です。関西の農園や農場は被害ない? 心配しても力にならない私。

四方田先生の手紙を受け取りました。四方田先生は、10月に事情証明せば香港に行って色々な人に会わねば! 情況を臺いでおられます。香港からパレスチナを遙視しつつ。

7月8日 東京新聞の7月3日「大波小波」で「重信房子の短歌」とコラムが載っているもの送って頂きました。月光62号の「暁の星」からの論評です。過ぎたコメントにありがたく、また気恥ずかしいですが、褒められると嬉しくなります。「日本の和歌は古代より政治的イデオロギーの如何を問わず、政治的挫折者の情念を語り続けてきた。重信の歌は大津皇子や後鳥羽天皇に始まる歌の系譜にある」と記されています。大仰な位置づけて論評されて、月作の私は身を竦めてしまいますが、自分の歴史的位置から読みづけようと励まされて読んでいます。

7月14日 ずっと日本列島は大雨続き。昭島も梅雨らしい雨続きです。今日は親類の嬉しい面会も叶って、いろいろ話もできほっとしました。ここで購入できない補聴器の部品も差し入れてもらいました。午後には分類課の面接がありました。前の処遇課の方との話でも感じていたことですが、今後移監せず当施設で懲役労務(と言つても軽労務でしようが)が開始されるようです。私のように日常生活に支障のない患者を対象にして行われるのだろうと思います。去年私の移監を主張していた処遇首席の「其申」を受けてそくなつたのかもしれません。他に移監になると腸閉塞など不安があり、去年も「作業はしても移監は望まない」と私は希望していました。コロナもあり、ここに居られるなら病気に対応して下さる主治医もおられ、安心です。作業(労務)が入るとユニホームからして変わるので、(今は作務衣パジャマ)わかりませんが、とにかく移監見送りでホッとしています。私の「矯正指導」上、新しく作られた方式のようです。

分類課面接の後、久しぶりに4ヵ月ぶりのコーラスが再開されました。広い講堂に4人。初めてフェイスシールドを装着して、5mずつ大きく距離をとって、10m程離れた再会を喜ぶ先生の挨拶のあと、七夕の歌。ピアノ演奏の方が新しくなって紹介と共にシューマンのクララ婦人への曲を流れるように演奏して下さいました。新しい歌「いのち」生きてゆくことの意味聞いやけるたびにか~という初めて知る歌を習い、最後には「花は咲く」です。フェイスシールドをして、補聴器だと自分の声が大きくて、伴奏も聴こえないし、取るといぶん離れた先生の声が聴こえず……。まだコロナ新システムには戸惑うばかりでした。

今日はコーラスで初めて3密対策を経験し、巷を想い実感しました。おちつかない空気のような……。今日コーラスで講堂に入る時、日陰ですが6本の紫陽花が貧弱ながら花をそれぞれつけていて、何だかうれしい花見。青葉のアジサイとゼンク系が2本です。

“紫陽花の雨に明かわ砂利道に倒れし花見ゆ囚徒の行進”

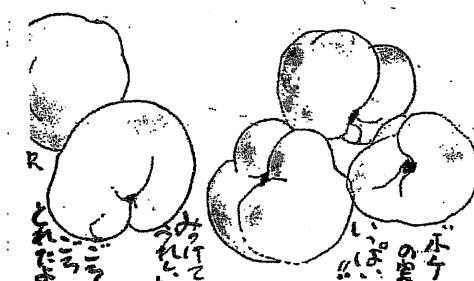
“初めてのフェイスシールドコーラスの再開されて七夕歌う”

7月16日 「夫の自死の真相を知りたい」と森

友改さんの真相を求めて法廷開始。法廷で、妻が問わざるを得なかつた政府の不誠実。妻の訴えに對して、国も佐井氏も争う。という更なる不誠実です。政局や自分の職員としての当選や保身ばかりの政治家と忖度官僚ばかりの「国民二の次政権」の実態を暴く機会になるでしょう。

“重い主は国民”と語りたる夫の意志を継ぎ妻法廷に稟呼と起り

7月18日 「女帝小池百合子」を丁度読んだところです。著者は石井妙子という69年生まれの作家ですが、「選挙」誌にも「をんな主一夜」を連載していて、女性の本質を突いた筆致が島崎今日子を思わせる鋭さで、好きな文体でしたので読んでみたいと思いました。しっかりと庭園の余地なく小池百合子の嘘で作られた物語を暴き、論証している本です。その物語の出発となった「カイロ太学首席卒業」が、いかに嘘で、エジプト政府がそれをよく知つてながら小池との利害一致から糊塗していることがよくわかります。小池が隠しつつ部分を見せたりした「卒業証書」と「卒業証明書」(これまで3回しぶしぶ見せたらいい)が、実は同じものでない上に、アラブ語では、女性と男性に表記に違いがあるのも本人は理解していないことも詳しく説明しています。「カイロ太学首席卒業」は、彼女が政界への出発をなしているもので、法的にも違反をマスマディアが追求しないばかりか、マスコミが彼女の虚榮心と虚像をつくりあげてきたことを批判想起しています。エジプトに住む小池19歳からの同居人が、日記・手帳で彼女がコネで入学し、ほとんどカイロ大学にも行かないまま「首席卒業」を言い出した驚きと、それを公にすることでエジプト政府からの何らかの報復を恐れつつ、しかし、人々が眞実を知るべきだと明かしたことが光明に記されています。私にとつてはちつとも驚かない「カイロ大卒」のごまかしです。政治的に政権に有為な人材は、エジプト政府は嘘でも守るからです。エジプトへのODAの額は、2016年まで1568億円の無償協力で、その一部はカイロ大学にも渡っているそうです。小池は、環境大臣の時代に「タールビズ」などの目くらまして、水俣やアスペスト裁判の被害者たちに嘘をつき、糾弾されつつも、何の相当の償いもせず、無視したままであったこと。関東大震災の朝鮮人



被害者への行事での東京知事の追悼のコメントも発表したように、一事が多方被害者や国民の側の立場をただ利用してのし上がってきた人です。この著を通して政治家の世界の虚偽と虚飾のひどさ、特にマスコミ男たちの乗せられやすさ、倫理意識のなさを驚かせました。小池方式がマスメディアによって増幅されて、本質が目くらましのままファンションやキャッチフレーズが社会に浸透し、みごとに大差で都知事に再選されていく日本社会です。「知らない」ことがどんどん自分たちの足元からファンション化している現在が見えなくなっている恐ろしさを感じていました。「見映え」すべてが収奪・消費される風潮は、益々強くなっていることを実感します。警鐘を鳴らす良書として読みました。

7月22日 午後診察。8月27日に胃カメラの検査をしましょう」とのことでの検査承諾書に署名捺印。雨のための室内体操は2時半から3時です。終えると14時に面接された分類課の方が病室にみえました。そして「前にお話しましたように、新しい目標を持って作業を行な様告知にまいりました」と目標の記された紙には以下のように記されています。「目標1、心身の健康増進のため積極的に治療に取り組む。目標2、自己の罪に対する反省の気持ちを忘れずに規律正しい所内生活を送らせるとともに、できる作業に意欲的に取り組む。目標3、事件に至った自己の問題性を考えさせ、被害者への感謝の気持ちを高める」以上3点です。2の所内生活を送らせ(送り)、3の問題性を考えさせ(考え、または自覚)の文がちょっと私の目標ながら、指導の側の目標のままで、確認し署名捺印しました。連休明けから部屋引越も、懲役作業開始でしょう。出所に向かって新しい実践を社会訓練として参加していきます。「療養中」という身分は、これまでと変化はないということです。作業をする患者にはテレビの視聴も可能なよう、病気の治療もしつづけ作業、どんな感じが興味がわきます。

7月25日 曲稿をチェックしているところ。送られた新聞切り抜きにパンタさん50周年映画が出ていましたが、歌碑にもこんな歌(2007年歌日誌の10月30日)

“パンタ歌う「ライラのバラード」プラスチック

越したつた独りの親客は立ぐ”

“伝説のロッカー唄うメドレーに面会室は劇場と化す”

“アカペラの君のメドレー耳の奥夜の独房ライブが続く”など。

2008年9月30日の分

“誕生日ライラのバラード歌いに来た”ユニットの歌涙の私”

“祝宴の「ライラのバラード」余韻抱いて房に戻れば寂寥となる”

7月27日 朝起床点呼直後、処遇統括より「今日付で新しい工場で作業してもらいます」と通告されました。その後ピンク色の作業着に着替え、朝食後引越しがあり、北側 テレビのある房に

大床で引越しに、書類・衣類すべてベッドに乗せてベッドごと引越し。そのまま9~3時の作業のため規律正しく行うようにとのことで、出房して作業工場へ。と言っても、同階別の棟の独房二つより少しあきな部屋に数名。まず作業にあたって、その心構えを安全第一にと訓示。作業は民間からの請負仕事で、失敗しないようにと。その後、安全手順説明と作業説明。作業は民芸品製作です。とっても小さいだるま、ピンポン玉ぐらいの「起き上がり小法師」です。まず丁寧に紙型を整え、糊をぬりながら少しづつ丸くなるように。乾いたら磨き、ボンドでおもりをつけ、紙粘土で型を整える。その後4回白い色を塗っては乾かすを繰り返して半製品にするところまでが私たちの仕事です。午前中に20分休憩し、運動30分で昼食。昼食と休憩に30分で再び作業。午後も20分休憩があります。休憩ばかりの患者の懲役です。まだ指導刑務官のようには目利きも(これでOKか否かとか)できず、今日は丸く整えたり、ボンドを塗ったところ。少しずつ慣れるでしょう。昔は袋詰りなどですが、こちらの方が作る楽しみがあり、好奇心で寺のところは順調です。腰痛耐え難く、ヨルセットを許可してもらいました。私たちは「身体フォロー作業者」という身分で「身体フォロー工場」という部屋名がついています。療養者ながら体調をフォローされつつ作業する者という意味の位置づけのようです。3時すぎに戻って、引ち越し荷物の前に入浴。汗かきつつ荷物整理。作業は3時までなので、いろいろ提出すべきものの作業など。5時以降は自分のこ

れまでの作業も可です。相談中継は特別TV見れるとのこと。普段は7:00~8:55までとか、ニュースは見てみたいです。

7月28日 今日は「身体フォロー工場」出役2日目。まだ慣れない、あわただしい。朝7時半起床、洗顔点呼後、出役準備の作業服に着替え、朝の「願い事」要請書類や工場へ持っていく物品の準備、そして朝食。朝食後は、体温、薬服用、トイレ、食器洗い(箸やコップ)、ペンやノートなどは持ち出せないので、整頓しロッカーへ。9時前、出役準備の身令から身体検査など工場まで何度も。工場について作業前に、安全手順を唱和。いつも明るく朝らかに」から「わからないことは指示を待て」まであるもの。その後作業。立ったり座ったり話をすることなど、すべて掌手して許可を求めます。一般刑務所のやり方だそうです。作業中の起き上がり小法師の素材は、卵パック入れのような(プラスチックになる前の新聞、雑誌を溶かして型を固めた)紙製です。それに糊をつけて柔らかくして形をととのえて、だるまの形を調整し乾かします。少しずつ教わりながらやっていると、何だか小学校の図工の時間を思い出します。

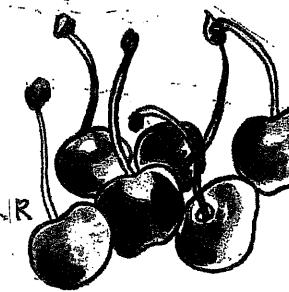
7月29日 今日もまだ慣れない作業を楽しんでいます。球状に紙粘土を使って仕上げた起き上がり小法師を食器洗いのスポンジの乾いたものと濡れたものを使って、球状ができる限りなめらかにします。ここでデコボコが少しでもあると、ペキンを塗った製品が不合格になります。

今日は作業の合間に「矯正指導非記録カード」のファイルを渡されました。分類化で示された目標3点に加えて、「自己改善を図り、成長するための目標」3点を書き込むよう指示。更に「生活上の目標3点」も書くこと。そして2週に一度位(月2回)の矯正指導目に、反省点、達成点を記し、提出する。更に矯正指導目に指示される教育VTRや放送「過ちは再び繰り返さない」などの番組に感想文を記入し、それらをカード(A4)に記して提出するようにとのことです。「目標」が多すぎて、まだファイルに何を記すのか考えさせません。ボチボチ考えようと思っています。ファイルは自己管理で、矯正指導目提出とのことで、今日渡されました。その他月間目標などもあります。これが「受刑勉強者」刑務所一般と同じ矯正指導シス

残暑お見舞い申し上げます。

コロナ禍に加え、猛暑、長雨、洪水と、地球の叫びのような夏が続いています。熱暑が収まれば今度は台風も続くかもしれません。厳しい日々、どうかお元気でお過ごし下さい。

の方は、日誌にも記しましたように7月末から、「新生活様式」に変わり、懲役軽労働に加わるようになりました。移監されず、医療センターにおいて労役に加わるので、ホッとしています。新しい生活様式を前向きにとらえ、皆様の支援に支えられつつ、R新生活を作り上げています。



テムのようです。

7月30日 今日は主治医が「身体フォロー工場」をちょっとと视察に来ました。といつても狭い部屋ですが、そして「作業の後、診察します」とおっしゃって、午後3時半に診察へ。「新しい労役は何日から始まり、体調など問題はないのか? 部屋も変わったのか?」など聞くされました。実は出役初日、北側への引越しもあったせいか、2日間不眠で葉を夜中にもらひ、その報告を受けて、主治医が心配して下さって、診察となつたようです。体調は昼間の作業にも影響はなかつたことなど、伝えました。今日の作業もまあまあです。

8月1日 今日やっと東京も梅雨明けです。細い隙間の空は、白い雲と青い空。ホントしています。でも蚊の声が続くのでしょうか。矯正指導3目標の他の目標を定めました。「自己改善を図り、成長するための目標の①は、出所後活かせるように、中東問題分析・研究の知識を深める。②短歌の同人に迎えられるよう文法・語彙・表現・技術を学ぶ。③社会復帰に有益な学習を重ねる。です。生活上の目標は、①規律に慣れる。②作業を学び慣れる。③体調の自己管理 としました。懲役軽作業、これが私の新しい生活様式です!

読んだ本

「天井のない監獄・ガザの声を聞け！」（清田明 宏著・集英社新書）を読みました。

この本の著者は、国連の世界保健機構（WHO）から出向してパレスチナ難民を支援するUNRWA（国連パレスチナ難民救援事業機関）の保健局長という立場にあります。著者は立場上も、政治的発言は控えて、人道的立場で一貫してこの書を記しています。それでも公正に現実を直視し、あまりにも悲惨な状況におかれただけのパレスチナの人々の声を伝えることによって、優れて政治問題を提出している一冊です。

この著者は、2014年のイスラエルのガザに対する空爆と侵略によって2,200人以上が殺され、国連・UNRWAの学校までも空爆を受けた事実を「ガザ・戦争しか知らない子供たち」という写真と文の本を出版した人でもあります。2015年発行だったと思いますが、私は、オリーブの樹132号（2015年11月8日号）で、この本の感想を書いています。

「ガザの声を聞け！」は、昨年5月に出版されていますが、あくまでもガザの人々の現実の生活、また殺された傷を負う人々がどのような治療を受けどんな地獄のような環境で闘っているのか、そしてまた、UNRWAの職員や、現地の医療従事者もまた、ほとんど難民キャンプの出身者、家族でありどんな困難の中で治療を行っているのか、わかり易く伝えています。

「はじめに」では、自身の「若い頃は夢を喰って生きていた」という医師になった動機を語り、またWHO憲章の「健康」の定義に触っています。「健康とは肉体的、精神的、および社会的にも完全に満たされている状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」と。単に肉体面で病気がないことではなく、人間としての尊厳、生活の質、未来を語れる状態としてとらえると、「それはガザが置かれている状況とは180度逆の世界」と著者はまず述べています。どこまでも続く未来の見えない生活が更に悪化しているのが今のパレスチナの現実です。とくに、著者は、米国のUNRWAへの支援の打ち切り（トランプ政権による2018年1月のUNRWA資金凍結、8月には支援の全面的打ち切り）で、医薬品の購入

も困難な深刻な事態の中で、人々は闘いながら、国際社会に訴えのりこえ、今ものりこえつつあると語っており、UNRWA自身の活動も知ることができます。

「パレスチナの人々の“生の声”を日本の読者に届けよう」と、著者はこの本を出版しており、第一章から日本とガザの関わりを、わかり易く記しています。ガザにあるハムニスという街は日本の支援で学校や診療所が建てられていました。東日本大震災の被災者を励まし連帯して、この街の子供たちは毎年3月開場式をしてきました。

2015年11月この街の3人の少年たちが招かれて支援への感謝と連帯を示すために日本を訪れたのです。でもUNRWAや3人の少年たちが、ガザを出るためにどんなに何度も通過許可を得るために奮闘しガザからイスラエルの厳しい検問を通り、ヨルダンにやってきたのか、それから日本へと向かう半日で済む旅程に4日もかかった姿を記しています。

この3人はまた、経済封鎖の中で、一日2~3時間しか通電不可能なガザから来て、洪水のような日本の電気の輝きに驚いたり、日本の同世代の子供たちとのスポーツ交流で「生まれてはじめて何の恐怖もなく自由に走り回りながら遊べました」と語る一言一言がガザの現実を日本人の人々に教えていました。

また、若者の失業率40%のガザの起業を支援する事業も著者らの発案ではじめたとのことです。人材を育て起業する若者支援の「ガザ・アントレプレナー・チャレンジ」として、2016年から実現していることも紹介しています。経済封鎖でヤメントの入手が困難の中、焼却灰を利用したコンクリートブロックを実用化する案を出した若い女性の起業を資金、技術協力を通して実用化を支援した話なども記されています。

「第三章 パレスチナ難民の健康状態」では、糖尿病が多いのはおかげを減らし安いパンを多く食べる食生活に加え中東の人々の習慣である砂糖を大量に入れた紅茶（シャイ）を飲むので太りやすく、また、イスラエル封鎖の中で適度な運動をする場も条件もむずかしい、こうした状態が、病気を生んでいることを語っています。約27万人の

糖尿病、高血圧患者がいるそうです。著者が管轄する医療分野はガザに140の診療所があり、それが家庭医チーム制度と連携して、くまなくガザの人びとにいきわたるようになっています。そしてまた、日本の母子手帳のこと。1994年からインドネシアでも使用されはじめ、パレスチナでも2005年からUNRWA、ユニセフ（国連児童基金）、JICA、パレスチナ自治政府保健庁やNGOなどが共同し、2008年にパレスチナ母子手帳がつくられ活かされるようになったそうです。このように、ガザと日本の関りを示し、イスラエルの封鎖と空爆下で、人々がどのような暮らしに耐えているのかを数値や、人々の声を多様に記しています。

「第四章 米国の大使館移転から『帰還の大行進』へ」では、2017年12月にトランプ政権が、エルサレムはイスラエルの首都と認めて以降どのような事態に至ってしまったかが語られています。西岸地区の占領、東エルサレムの支配と、イスラエルはこれまで過酷な弾圧を強い、新たなトランプ政権による無批判なイスラエル支援に抗し、パレスチナ住民たちが起ち上がりざるを得なかつたのです。

2018年5月30日パレスチナの土地のはからガザで毎週金曜日「帰還の大行進」のデモが行われるようになり、激しいイスラエルの銃弾がずっと続きます。ガザの人口の約7割の144万人（著者執筆当時の人数）の人々が、故郷を追ねてガザにやってきた難民とその子孫たちです。故郷へ何故帰れないのか？ 1948年の国連決議194で認められているパレスチナ人の「帰還の権利」を示す大行進・グレート・マーチが始まったのです。ガザとイスラエルの境界約40kmに及ぶフェンスに沿って複数箇所に何千、何万人の人々、家族連れも参加し2019年までの間に200人を超える人が殺され万をこえる負傷者という大弾圧の中で闘いが続けられたのです。

著者は、2018年5月にガザの病院を視察し医療体制の崩壊の実情を目撃しています。点滴が枯渇し抗生素もなくなり、骨折用の外部固定具も底をつけ、本来なら治療すれば救える命が亡くなっていく現場。医療スタッフらは呻き声をあげながら自分たちの同胞によりそい闘っている現場です。イスラエルが下肢を狙い特殊弾によって骨が砕けた人々が毎週金曜日毎に増えるのです。鏡で撃たれるのを恐れないのか？ と問う著者に、「もちろんそれはわかっている。でも私たちは難民キャンプに生まれ、育ち、ずっと難民として生きてきたのだから、人間としての尊厳がほしい。人間として世界から認めてもらいたい。そのため自分たちの故郷であるパレスチナの地に戻る権利をグレーント・マーチで示すしかないのかも知れまい」と語る人々。

著者は「『人間としての尊厳がほしい』、という心の叫びのように訴えを開いたひに、それを言わせる状況に心が痛み、胸が張り裂けそうになる。」と述べています。この叫びが著者をつきうごかしUNRWAの不足する資金の確保、ガザの人々、パレスチナ難民やUNRWAへの世界の人々の理解を求めて奮闘させているのです。米国のUNRWAの財政支援停止に対し、UNRWAの呼びかけに応じ40カ国が支援し、5億3800万ドル（約591億8000万円）の2018年1月の財政不足は2018年末には不足がゼロになったとのこと。米国の支援停止の影響は当面免れたという。こういう人々が国際機関で働き現実を伝え、解決に努力しようとしている姿を、もっと多くの日本人が知ることは、また、ガザのパレスチナ人を理解することでもあります。政治的でなく人道的で率直な現実の提示は、逆に犯罪的ともいえる政治の不公正がどんなにパレスチナの人々に悲惨をもたらしているかを証明してくれる一冊です。

ことに現在、新型コロナウイルスによる感染が世界を覆う中、ガザの環境はパンデミックの大被害をもたらす危険にあります。しかしイスラエル政府は、西岸とガザの通行を封鎖しました。その上、シェアファースト難民キャンプ（エルサレム市の管理下にあり占領当局のIDカードを住民約10万人の7割が所持している）の閉鎖によってエルサレムから排除を企んでいるということです。

コロナ禍に晒されぬようパレスチナ人へのまたUNRWAへの連帯を訴えつづける悪いです。

（5月6日記）

＊＊＊＊＊

「女子学生はどう闘ってきたのか」（小林哲夫著・サイゾー刊）を読みました。

この本の幕に上野千鶴子さんの言葉「女子学生は怒ってよい！」と大書きされていますが、この本を読みながら、まさにその通りだ！と思いつつ

読みました。

序章の「女子学生は世界中で闘っている」で著者は、「2019年は闘う女子学生にとって記念すべき年かもしれない」と語り、グレタ・トゥーンベリさんの行動に共感した163ヶ国、400万人以上の世界の若者たち、また香港、韓国など女子学生が先頭で闘ってきたこと、日本国内も女子学生が闘ったことにます焦點を当てています。日本でも反戦、環境、反原発、モリカケ、レイプ、セクハラ、医学部入学女性差別、就職差別など、理不尽はあまりにひどいから闘わざるを得ないのです。著者は「本書では戦後女子学生が生きてきた歴史をさまざまなアングルから追い（中略）そこで理不尽なことに直面した時、彼女たちはどう闘ってきたのか」を描いています。「女子学生」を対象、テーマとした理由は、第一に女子学生が入試、教育、就職で不利益を被ってきたからであり、第二は、最近女子学生が闘う姿が多く見かけるようになり、彼女たちを描きたいと考えたそのことです。つまり、「女子学生は差別され不利益を被った。そして女子学生が闘っている。これは本書を真く大きなテーマである」とまず述べています。

本の構成は、第一章で「2010年代後半、女子学生の怒り」で現在の社会で起きた問題に、いかに各大学の女子学生が闘っているのかを具体的に実名で示しており、本全体のインパクトがまず明瞭に記されています。その例は印象的で注目に値するので後に記します。第二章では「女子学生怒りの痕跡=『女子学生亡國論』の犯罪」60年代の社会、教育者、マスコミがいかに女性蔑視の封建思想が示され、第三章から第十章までは、さまざまなアングルー戦後の学生運動、社会運動参加、男社会で生き抜いた著名人たちから70年代のキャンパスやスキャンダル事件、80年から90年代の「女子大生ブーム」「オールナイトフジ」への現役学生登場、女子学生急増、ミスコン、読者モデル、就職での偏りから女子学生の小説、映画、音楽など文化創造の想い手たちの紹介まで一歴史的に社会現象を振り返りつつ解説しています。

敗戦後、女子学生の学生運動への参加もありますが、まだまだ「良妻賢母教育」や「女子学生亡國論」等男性中心の社会が続いていきます。それをかきぐり、闘いながら、80年~90年代の男女雇用機会均等法が施行され、女性が社会進出を果たしていきます。しかし、男性中心に歴史的

に構造化された日本社会とその思想的根本が変革されない限り、女性差別やセクハラは、より商品化され手段が付けられ、あるいは隠然とした差別や排除が今も「王道」のごとくまかり通っていることを本を読みつつ実感します。1955年には18歳人口が168万2239人で、大学進学率は男子13.1%、女子は2.1%です。大学数は228校で女子大は32校の1万5千人という超上流エリート。2010年代の今では、マスプロ教育を経て、大学生数260万948人のうち、女子学生は118万3962人、45.4%に達しているそうです。

私自身はいったん1964年に高卒で社会人として就職し、その後、1965年に教師を目指して夜間大学に大学し、働きながら大学に通いました。会社の女性差別を含む社会の矛盾は根本的に社会政治革命抜きには変わらないと考え、革命を目指したので、「女子学生」というアイデンティティは私にはきっと薄かったと思います。でも、第一章にあげられている女子学生たちの理不尽には届しない、まっすぐに闘う姿勢は、自分の初心を振り返りつつ、とても共感しました。しかも、当時の野党を含む政治的な反政府勢力の広がりの中で闘うよりも、今の個人から出発した主体的な行動の難しさを乗り越える勇気ある行動に今後の可能性を見ます。

その一例が第一章の国際基督教大学の山本和奈さんの怒りと行動です。「週刊SPA!」2018年12月20日号の「ヤンる女子学生RANKING」として、大学の実名をあげてセックスやすい女子学生を紹介した記事に対して「いてもたってもいられなかった」と衝撃を受けたのです。すぐにSNSを駆使し、同記事の撤回と謝罪、女性蔑視や差別用語の使用をやめることを要求する署名を、3日間で2万6千筆以上集めたのです。あわてた「SPA!」編集部の「煽情的表現のお詫び」に対し、山本さんと賛同者は「論点がずれている」と編集部に面会を求めます。「編集部の一人を説得することもできなければ、社会を説得することはできない。逆に一人が説得できたらみんなに伝わるんじゃないでしょうか」と語っています。編集部は完全に説得され、逆に海外在住経験のある彼女らからセクシャルな記事のアイディアを提案されたと話しています。国際基督教大学同窓会は、この山本さんの行動に「大学およ

び同窓会の魅力度、知名度を高めることに貢献した」として表彰しています。2015年にも国際基督教大学は、安保関連法案反対でSEALDsとしてスピーチした女子学生にも大学側は、「民主主義、平和、人権を尊重する本学のリベラルアーツの理念を体現し、賞賛に値する」と賞を贈ったそうです。国連の原則に通じた大学側の姿勢は、今のソフトにファッショナブルな日本で大切な堡星の一つと言えます。

後にこの学生、山本さんはチリに滞在し、昨年10月のチリの大規模抗議デモの様子を伝えつつ、「日本は安全ですか？ 幸せですか？」と日本も同じ格差社会と問っています。「日本でどれだけ大企業が税金を払っているのか、なぜ原発が世界で4番目に多いのか、なぜこんなにもギリギリで生きている人が多いのか考えてみて下さい。長年私たち日本人が薪でガエルのようにゆくつくり薪でら

れてきたからです。（中略）もし今の生活にまったく違和感がないのであれば、あなたは恵まれています。その分、あなたの行動、あなたの発言は何か変化をもたらす可能性があります。だからどうか声が届かない人の声に耳を傾けて下さい」と地球の向こう側からまっすぐな眼差しで訴えています。若い日本人のそうした主体的な力は、やはり国際的な交流や国外から日本をとらえた時「日本の常識」のいくつもの非常識を知ることができるところ生まれています。自らの感性を深く問う誠実さが、日本の非常識を破る強じんな変革の兆しを育てているように思います。

自分たちの60年代、70年代の「異議申し立て」のあり方との時代・社会の違いを振り返りつつ、これから希望を描きつつ読みました。日本の女性、女子学生の歴史を分かりやすくまとめており、学ぶことのできる1冊です。（6月5日記）

出会いー泉水さんのこと

重信 房子

殺されてしまう……。義理に燃えた泉水さんは「事件」を起こすことで、劣悪な獄中医療に社会の目を向けさせねば……と思い定めました。

当時、千葉刑に収監されていた泉水さんの獄中仲間に族旗開拓の右翼民族派リーダー格の野村秋介さんが居ました。彼は泉水さんの「決起」を駆除された後すぐ、マスコミを通じて社会に伝えました。泉水さんの「決起」(仕事の裁断用はさみを武器に、刑務官を人質にして、病人の治療改善を訴えた)はすぐ取り押さえられ、千葉刑によって内密に処理されようとしていたからです。

自分の損得も考えず義理にかられて立ち上がった泉水さんの事件とその公判での主張は、野村秋介さんによつて週刊誌でも広く伝えられました。この「事件」によって、泉水さんの仮釈放への道は取り消され、裁判を経てその後、北海道旭川刑務所へと移監されました。そして、病人の同囚は、泉水さんの努力が実ったのか八王子医療刑務所に移監されたとのことです。

当時は、PFLPの事務所に日本から人が訪ねたり、マスコミや知り合い以外にも、いろいろな人から、糾弾や批判、支持、参加したい、「こんな作戦をやれ」など、かなり無責任なものから誠実な手紙までいろいろ届いていました。そんな

中に、野村秋介さんの週刊誌に訴えている記事もありました。

私は初めて泉水さんと会う前にも丸岡さんから、泉水さんについて二つのことを聞いていました。一つは泉水さんの考え方です。今回、泉水さんが奪還に応じたのは、唯私たちの作戦によって人質となっている乗客を助けるために自分が役立つならと考えたこと。日本赤軍については何も知らないし、自分がこれからどう生きていくかなど考えてはいなかったという泉水さんの率直な話です。もう一つは獄中で劣悪な医療環境で、治療が放置されてきたために、泉水さんの筋が脱筋状態で下りてきてしまい、大変苦労されているということでした。私たちは丸岡さんの話を聞いてすぐPFLPの医師たちに相談しました。信原医師、ドクトル・スワードも協力してくれました。本人の診察が必要なのは言うまでもないが、可能なら手術を早急に行うべきで、病院にはドクトル・スワードが付き添ってくれることで、準備を整えていました。それらのことをまず泉水さんと相談しようということで、私もお会いする機会がありました。

泉水さんにはまず一方的な日本赤軍からの奪還指名による「悪い入れいについてお詫びしました。そしてまず、病気を治すこと、その後で、お互に率直に語り合い、協力できることはありますはずだからゆっくり考えていくと語り合いました。泉水さんは自分が場違いなところに来てお荷物になるのではないかと、しきりに察していました。静かな話し方をする人ですが、話し出すと自分の考えをしっかりと持った人だとわかります。自分は人質の乗客を唯助けたいために来たことを語り、また飛行機の中で何か役に立ちたいと、うろうろ手伝おうとしてちょうどエアポケットに入った飛行機の急降下でしたたが腰を打ったと、恥ずかしそうに笑った顔が印象的でした。

ダッカ闘争が起った直後、北海道の旭川刑務所では、人質のために奪還に応じると言うと、ホーッと喜んで北海道から東京へ連行しながら、東京では検察官僚たちの意向を受けて、今度は、寄つてたかって行くことに反対して懇喝し始めました。泉水さんとしては頼まれたから唯自分は乗客の代わりに行くというのに、官憲たちの不誠実で不審なやり方に不信をもつて、自分で決断してここまで來た、と語っていました。飛行中、泉水さんは

「どんな奴らか?」と作戦グループをうかがってきたが、正直で邪心のない若者たちだったので、ホッとしたと話していました。出会いの話の中で、一番印象に残ったのは自分が闘いに賛同してアラブに来た訳ではないという話の中で革命運動や党派の闘いのニュースを聞いたり、テレビで見たりする度に、好意と反対の感情を持っていたと話してくれたことです。「殺しやたたきが、革命の名で許されるなんて、革命なんて便利なもんだな」と、冷ややかに見ていたと言いました。その思いは自分たちがちょうど77年5・30声明(「团结をめざし、团结を求め、团结を武器としよう」)で、自分たちが闘っているといった、傲慢で人民性に欠けたあり方を絶対し、自己批判してきたことにつながるものとして、みなよくわかりました。

私からも、パレスチナの友人とはこんな風に話していますと、泉水さんに語りました。大義の名で人の道にはずれ、人権を無視する闘い方は本当の革命ではない。もちろん膨大な敵と小さな私たちの力では「勝てる闘い」には限界があり、今回のよう闘い方もしています。でも、それは代わりとしてもうのではなく『こういう闘いしかできない』のは誤り。克服否定して聞わなければいけない」と思ひながら語り続けています。ヒューマニズムのない革命なんて革命じゃないから。そんな思いを伝えました。パレスチナの闘いが民族解放の手段として、「武装闘争」を闘うからこそヒューマニズム、命を尊いものと考えずにはいられなくなつた経験など、私たちが学んだことも伝えました。それはちょうど77年の5・30声明で、表明してきた想いと重なります。こんな風に何度も泉水さんと語り合う機会があり、泉水さんは革命とか理論とか知識に、これまで触れることがなかったけれど、自分の若年の過ち失敗や反省を、心の深いところで持つている人だとわがりました。そして、日常的な判断の中でも、いつも他人を慮る心の細やかな人、ヒューマニズムを信念のように「義理」として持つている人だと実感したものでした。

その後、病気も手術ですっかり良くなり、一緒に暮らし、一緒に歩むことになりましたが、初めて会った時の印象通りの人でした。活動の中で、若い仲間の新左翼的な観念的「べき論」には疑問を呈し、批判していました。また、獄中で学んだ印刷製本技術を仲間に教えながら、機関誌作

成で、力を發揮していました。当時の月刊誌「人民通信」の題字は、達筆な泉水さんの毛筆によるものです。そしてまた、パレスチナアラブの人びととの交流には大人気でした。歌がうまいので、みんなからリクエストされます。民謡とサブちゃんの演歌はプロ並です。ある時には意気投合した泉水さんと「義兄弟」を誓った友人もいました。

フィリピンに移ってからは、みんなに祝福されて愛するフィリピン人、ロディと結婚しました。夫人のロディは、泉水さんの細やかな思いやりに支えられ、幸せそうでした。働き者で、「若返ったと言われるのは」と喜んでいた姿、大らかな人で、時に夫をイライラさせながらもニコニコ支えていました。あの頃には、様々な国際連帯の可能性が生まれていました。しかし、アジアの人びとのためにと役割を果たしている途上で逮捕される事態に遭遇していました。そこには苦しい日々の教訓があります。私たちは事態の直面に、泉水さんが逮捕された後夫人に多く苦労をかけたであろうことを、私が逮捕された後に知りました。その夫人も彼岸の人となってしまいました。丸岡

さんと共に泉水さんの貢献した数々は、抑圧された人びとの支援であったことは、秘かな誇りでもあります。

そしてまた、泉水さんは私たちに与したとして、政治的報復をして(泉水さんの私たちと出会い以前の「無期刑」を悪用し、「公安事犯」として)長期拘留を科されてきました。こうした検察権力の恣意的拘留に怒りを強く持っています。すでに日本赤軍解散から14年以上もたつているというのに……。と同時に私たちのために今もこうした困難に直面している泉水さんに心から謝罪します。そして、かつてあった一方的な出会いの感謝を伝えます。

2015年8月16日記

(註)「ダッカ闘争と泉水さんのこと」という文章は、2015年8月に、泉水博士の支援・出版の計画時に執筆したもの。それは、1.時代の中の闘争、2.ダッカ闘争とはどんな闘いだったのか、3.出会いー泉水さんのこと、で構成されています。

泉水さんを追悼し、その一部分(3.出会いー泉水さんのこと)をここに掲載します。

パレスチナ解放闘争史

1916-1991 オスロ合意に至るまで

近く本一ムページ「リベラシオン」上に「パレスチナ解放闘争史」をアップします。
その「目次」と「はじめに」をここに掲載し、紹介致します。

目次

はじめに

第1章 アラブ民族主義運動とパレスチナ-サイケス・ビラ候補-バルフォア宣言の中で

1. アラブの歴史
2. シオニズムの立場-パレスチナへのユダヤ建国の企み
3. 第一次大戦と英國の二教徒外交
4. 第一次世界大戦とアラブ民族主義
5. 英国委任統治下のパレスチナ
6. パレスチナ・アラブ民族主義の誕生
7. パレスチナの社会主义・共産主義潮流

第2章 パレスチナ分割

1. 第二次世界大戦中のアラブ・パレスチナ
2. 戦後処理-ユダヤ人問題とパレスチナ
3. パレスチナ分割決議
4. シオニストのたぐらみ-パレスチナ民族独立
5. パレスチナ戦争-第一次中東戦争

第3章 ナセルのアラブ民族主義とパレスチナ

1. イスラエル占領下のパレスチナ
2. ナセル革命とアラブ民族主義
3. スエズ戦争-第二次中東戦争
4. ナセルのアラブ民族主義の影響
5. パレスチナ主体形成-PLOの発足
6. 第三次中東戦争とパレスチナ民族主義
7. パレスチナ解放の道

第4章 パレスチナ解放勢力の登場

1. 第三次中東戦争後の中東
2. パレスチナ解放勢力の登場
 - 1) アルカラームの闘争とアラブ人
 - 2) PLOからパレスチナ解放人民戦線(PFLP)
3. パレスチナ解放機構(PLO)の変革

カーブの歴史

第4章 パレスチナ解放勢力の成長と矛盾

- 1 ヨルダン内戦
- (1)スエイン王の窮屈
- (2)ヨルダン内戦激化
- (3)ナセルの急逝

第5章 パレスチナ代表権を巡る闘い

- 1 ナセル後のアラブ世界
- 2 ヨルダン内戦の教訓
- 3 ヨルダン最後の基礎ジエラルの闘い
- 4 フセイン王の「アラブ連合王国構想」—パレスチナ代表権剥奪
- 5 PLO政治軍事攻防
- 6 第四次中東戦争
- 7 アラファトPLO議長、国連へ

第6章 PLOの復讐の企み—キャンプダビッド合意

- 1 レバノン内戦勃発
- 2 イスラエルの内戦介入
- 3 エジプト・サダト大統領のイスラエル訪問の衝撃
- 4 イスラエルのレバノン侵略と占領
- 5 ワディーエ・ハゲートの死と国際連撃戦の終焉
- 6 キャンプダビッド合意(CD合意)
- 7 CD合意に抗するパレスチナの闘い
- 8 イラン革命とパレスチナ

第7章 PLO破壊—イスラエル軍ペイールート占領

- 1 カーター政権からレーガン政権へ
- 2 第15回PNC
- 3 第二次ベギン内閣の危険な動き
- 4 イスラエル軍のレバノン侵略
- 5 レバノン南部戦場の闘い
- 6 包囲下のペイールート
- 7 PLOペイールート撤退
- 8 サザラ・シャティーラ難民キャンプの虐殺

第8章 PLO分裂

- 1 中東和平提携—PLO撤退後のレバノン
- 2 パレスチナ解放勢力の再編 第16回PNC
- 3 アラファトの対立
- 4 西ペイールート解放の闘い
- 5 PLO分裂 第17回PNC
- 6 「アンマン合意」とパレスチナ民族救済機構の成立
- 7 レバノン再建とパレスチナの矛盾

第9章 民衆蜂起—パレスチナ独立戦争

- 1 第二期レーガン政権とゴルバチョフ政権の登場

場

- 2 南挽期の中東—シサイニシアタイプの確立
- 3 イラン・イラク戦争停戦へ
- 4 PLO統一の試み—第18回PNC
- 5 イスラエル占領下の実情
- 6 インティフターダ(民衆蜂起)始まる
- 7 韶起民族統一導部のもとに不服従宣言
- 8 ヨルダン政府の西岸地区主権放棄
- 9 パレスチナ国家獨立宣言

第10章 東欧崩壊・海湾戦争とPLO

- 1 PLOの政治攻勢とインティフターダ
- 2 中東和平を巡る動き
- 3 カサブランカ・アラブ首脳会議の本音
- 4 東欧崩壊
- 5 海岸戦争の危機—イラクのグエート侵略
- 6 アラブ・パレスチナの大々的反応
- 7 オペレーション・デザートストーム(沙漠の嵐作戦)
- 8 イラクの戦勝とPLOの危機

第11章 PLO存亡を賭けた和平交渉

- 1 中東和平への道—諸王政府の動き
- 2 PLO抹殺の危機
- 3 第20回PNC
- 4 マドリッド中東和平会議への道
- 5 マドリッド中東和平会議の攻防
- 6 和平交渉を巡るパレスチナ勢力の反応

第12章 PLO—イスラエル相互承認—オスロ秘密合意

- 1 ジヤミール首相からラビン首相へ
- 2 ラビンの政策
- 3 クリントン政権とラビン政権
- 4 交渉再開か否か
- 5 オスロ秘密合意
- 6 アラファト・ラビン書簡

第13章 「オスロ合意」の裏

- 1 「オスロ合意」反対
- 2 初めてのPLO・イスラエル自治交渉
- 3 PLO内の民主化要求
- 4 アラブ諸国の動き
- 5 ガザ・エリコ自治合意・オスロ合意の裏へ
- 6 アラファト議長・PLO・パレスチナ帰還

後章 その後の「オスロ合意」とパレスチナ解放闘争

幕

はじめに

かつて私自身が夢を描きながら参加したパレスチナ解放の闘いは、今日、年々益々激しい危機的現実に直面しています。1948年の第一次中東戦争の前後にイスラエル・シオニストの武力によって、パレスチナから

スチナ人は、当時倍増を超過していました。今ではこのパレスチナ難民とその子孫は、UNRWAによれば難民登録は550万人を超えて、パレスチナ・ヨルダン・シリア・レバノンなどで、多くは難民生活を強いられたままに居ます。

1948年12月の国連総会決議181は、これらのパレスチナ難民が故郷に帰還する権利と賠償を認めながら、イスラエル政府の拒否にあつたまま現在に至っています。何故、こうしたことが起こり、そして今も解決されないのか?私自身が活動し暮らした立場から、アラブ・パレスチナの歴史を辿り、ここにパレスチナ解放闘争の歴史をまとめました。ここでは私たちの活動の記述は、中心ではありません。

解説的になりますが、通史的にまとめました。(解説的にならざるを得ないのは、私の作業環境があります。自著引用も含めて、当時の私たちの活動「武装闘争」などの記述には「受刑逃走」の制約があり、当時の本の差し入れは検閲で不許可となり、無理がありました。それにパレスチナ解放の歴史にとって、私たちの関りは小さなものにすぎません。)

ここに記されている歴史の様々な事実は、中東問題専門家なら既に知っている内容です。それでも、パレスチナ解放闘争を主軸とした歴史的記述を私自身、パレスチナ解放を経験している概説的な一冊を自分も読みたかったし、中東に興味のある人にも読んでほしいと思ったからです。

内容は、中東研究者やジャーナリストたちの分析や記録、私も私の仲間たちの記した経験や論文・記録を読み返し、取捨再構成し、それらの記録を引用しながら、この著作を作上げています。

ここに記されている事象は、私自身の活動してきた考え方や立場からまとめてるので、内容的には「パレスチナ解放闘争私史」とも言えます。記述にミスや過ちがあれば、その責任は私にあります。

このパレスチナ解放闘争史は、1916年から1994年迄を概説しています。

1916年を起点としたのは、1916年がアラブの民族的意志に目覚めた者たちがアラブの独立国家を求めて初めて大規模に燃え立った年だからです。しかし、当初は「アラブの解放と独立」として闘い始まりながら人共畜国に裏切られてパレスチナは植民地化されます。パレスチナ解放の歴史として必要なので、この時代を省くことはできません。また、パレスチナ解放闘争は「オスロ秘密合意」(1993年9月公表)によって、180度転換しました。

このオスロ合意によって、アラファト議長とパレスチナ解放機構(PLO)本部が、祖国パレスチナに帰還した1994年を、この本の区切りとしました。何故なら、オスロ合意によって「敵イスラエル・シオニスト」と和解し、解放闘争機関であったPLOは、政治機関に転位したからです。

公式には、パレスチナ解放闘争は終わったという誤です。この180度の転換は、パレスチナ解放運動を分裂させ、その上イスラエル政府がオスロ合意を認めなくなつた結果、現在の混沌が作りだされました。

つまり、PLOは、パレスチナ難民を基盤とし、武装闘争を軸に祖国解放と「帰郷の権利」を実現する解放闘争司令部から、イスラエル占領下の領土のパレスチナ住民を基盤とする統治権力・自治政府(PA)を生み出す政治主体へと変化したのです。もちろん、PLOとPAは、その役割も位置も違います。

PLOは、全パレスチナの唯一合法的な代表機関であり、PAは、パレスチナ占領地に住むパレスチナ人、西岸の一部とガザ地区のみを統治する政治権力です。しかし、PLO議長であるヤーセル・アラファトと、PLO本部がPA地区に移り住み、更にアラファトがPA大統領とPLO議長を兼ねたことで、PAの実体化に反比例してPLOは形骸化してしまいました。しかも、オスロ合意に反してイスラエルの占領と弾圧が続き、パレスチナの人々は、占領と併合、弾圧に抗して闘いを止めることができません。

Palestinians with Israeli citizenship protest against Donald Trump's "Peace to Prosperity" plan to resolve the Palestinian-Israeli conflict. Baqa al-Gharbiyya, 1 February 2020. Human rights groups say the proposal amounts to a permanent state of military occupation and apartheid.

PLOによって、公的にはイスラエルと和解し、解放闘争が終わったとオスロ合意で宣言された後も、パレスチナでは占領地解放闘争を統治ざるを得なかったのです。PAは「オスロ合意」、イスラエルと国際社会の約束に縛られて、パレスチナ人民に対する抑圧機関として登場し始めます。

このように「オスロ合意」によって、パレスチナ解放闘争が転換し、現在に至る混沌の原因をなしているので、オスロ合意に至るまでの歴史を区切りとしました。その上で、オスロ合意以降トランプ政権までの歴史もまた、条件があれば記したいと思っています。

「解放闘争」という言葉は、ここでは、1916年以来の植民地支配からの解放という意味で由来します。「解放闘争」と「パレスチナ独立(国家)」は、かつて全く(まったく)一つの闘いであり、目標でした。占領されたパレスチナの金土を解放し、そこにユダヤ人もパレスチナ人も、宗教や人種によって差別されることのない「民主パレスチナ国家」をうちたてることを目標にしていた

からです。

これは1968年にパレスチナ民族議会(PNC)で採択した「パレスチナ民族憲章」に基づく政治方針です。1967年の第三次中東戦争によって、パレスチナ全土、更にアラブ領土もイスラエルに占領された衝撃的結果を受けて、最早、これまでの如きアラブ諸国に任せて解放を待つのではなく、自ら闘う主体としてPLOは武装闘争による全土解放を掲げて闘い始めました。この時期、パレスチナ民族憲章が新たに決定されたのです。

その後、第一次インティファーダ(被占領下の人民蜂起)の闘いの中から、1988年民族議会(PNC)において、「パレスチナ国家独立宣言」を発しました。この時のPNCで、現実に対応して、パレスチナ全土の22%にあたる西岸地区とガザ地区に、パレスチナ国家を建設するという道を選択しました。その後、湾岸戦争や中東和平交渉を経て、PLOアラファト指導部は「オスロ秘密合意」によって、イスラエルと講和し、パレスチナ民族憲章の掲げた「イスラエル敵対条款」の削除も約束しました。しかし、オスロ合意に反対したPLO内外の勢力は、現在もパレスチナ民族憲章の改変、削除に同意していません。

一方、イスラエル政府は、PLO指導部が譲歩して合意した全パレスチナ領土の22%すら返還せず占領地の併合と「エダヤ化」をすすめ、先の「オスロ合意」から27年を経た現在も、西岸自治区のわずか19%をPAに返還したにすぎません。これまで一つの目標であった「パレスチナ解放」と「パレスチナ独立国家建設」は、オスロ合意によって分断されてしまったのです。その結果、オスロ合意の「二国解決案」の描くパレスチナ国家は、インティファーダの申から生み出された「パレスチナ国家独立宣言」で語られた国家とか離れたものとなってしまいました。イスラエルにどうでは、当時のインティファーダを終わらせる「イスラエルの安全保障」としてPLOを相手に選んだにすぎなかったのです。

また、この本書の中では、パレスチナ解放闘争とアラブ諸国との関係を多く記しています。パレスチナ解放闘争は、良くも悪くも、アラブ諸国の歴史と存在から切り離すことはできません。パレスチナ難民、イスラエルの存在は、アラブの政治的諸関係に影響を大きく与え、また、パレスチナの闘いも影響を受け合う関係にありました。そして、PLOが、オスロ合意というイスラエルとの「単独和平」に進んだことで、アラブ連盟諸国の「包括的和平」が挫折させられました。それはばかりか、オスロ合意はアラブ諸国のパレスチナに対する責任や当事者性を損ないました。その結果、イスラエルと米政府がオスロ合意を反古にすると、PLO・PAは陥落にはまつたように難しい状況を迎えて現在に至っています。

本書では、国際情勢に連動する「アラブの中のパレスチナ解放闘争」というアングルから、オスロ合意に至るパレスチナ解放の担い手たちを辿っています。アラブの政治と不可分のパレスチナ、それが私自身の活動し、暮らして来た実感でもあるからです。

本書が、パレスチナの歴史的経緯を理解する一つの素材となれば、そんなに嬉しいことはありません。
2019年5月30日記(2020年6月5日校正)

150号の誤植の訂正とお詫び

表紙 目次下から5行目 ダッカ闘争→リッダ闘争

2頁本文3行目 遊説→虐殺

4頁下から10行目 現実突き付け→現実を突きつけ

4頁本文下から4~3行目 「がら告発されています。」

削除

8頁右列下から14行目 テジオが→テジオが告げる

10頁左列下から19行目 『暁の星→『暁の星』

10頁右列上から11行目 「過剰な資本の欲望が」削除

10頁右列上から21行目 後ろの「コロナは」削除

13頁左列下から21行目 敏感に→敏感に自然を

14頁右列上から17行目 武官→武漢

14頁右列下から20行目 いるだのに→いるのに

15頁タイトル1行目 ダッカ闘争→リッダ闘争

最終真正誤表右列下から5行目 ありました。

→あいまいにした。

後記

先に、「オリーブの樹」のホームページを立ち上げると予告していましたが、「オリーブの樹」は、ホームページ「サベラシオン」にもアップされていますし、この間「オリーブの樹」をネットより冊子を受け取りたい読者の方々の方が多いことも判りました。ホームページの作成は、2年足らずに迫った重信さんの満期を待って、本人によつて始められることに期待し、編集室はホームページ作成を中止し、全面的に冊子を発行していくことにしました。これまでどおりご支援よろしくお願ひします。(Y)

重信房子さんへの郵送アドレス 〒196-0035 東京都昭島市もくせいの杜2-1-9 重信房子

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター 気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

販売価格 500円